

お告げのマリア

はまでらきょうかい やまぐち み き お
浜寺教会 山口幹夫

この原稿の依頼を受けた日の朗読聖書は、大天使ガブリエルの「マリア様へのお告げ」だった。いつもここへ来るとちょっと、立ち止まってしまう。

大天使のお告げにマリア様は「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」と聞き返された。確固とした質問をされた。

天使が出現した。これは普通の出来事ではない。そして告げられた内容はとても重大。そんな中で質問をされた。大天使はマリア様の質問に対して異を唱えることなく、「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから生まれる子は聖なる者、神の子とよばれる。」と答えた。大天使の答えを確かめると、マリア様は「お言葉どおり、この身に成りますように」と、引き受けられた。確固とした質問をされたあと、いとも素早く引き受けてしまわれたのだ。

「もっと説明して！」なにかが釈然としない思いがあった。

それが今日ひらめいた。わだかまりが解けた。「今も」そして「これからもずっと」という事だ。

「マリア様は、婚約後のこれからもずっと、神様だけに身を捧げて、自分の純潔を守り通すおつもりだったんだ！！」ここが呑み込めていなかった。納得できる情景がある。

今から幾つかの解釈を紹介する。聖書には書いていないけれども、私に参考になったように、他の人にも参考となるかもしれない。

『聖母マリアの詩』マリア・ワルトルタ著、フェデリコ・バルバロ訳」の中に、ヨゼフはナジル人と記してあった。今で言うなら修道士だ。

更に、マリア様は年端もいかない時に、「自分の身体は神様だけのもの。神様だけにお捧げする。」と宣言しておられる。母親のアンナは、幼い子はその意味をわかって言っているのかを疑問に思ったので、聞き返してみたところ、しっかり理解しておられた。3歳になると、両親と共にエルサレムの神殿の門をくぐり、14歳頃まで奉獻された神殿の処女としてそこで生活された。やがて神殿を退去する年齢を迎え、イスラエルの一般世間に戻らなければならなくなったとき、当時のイスラエルでは結婚が待っていた。それは当時のイスラエルの慣習で、それ以外の選択肢は無かった。母になる事が名誉で、母になれないという事は不名誉だったからだ。マリア様への天使のお告げはそういうときだった。

キリスト以前には、まだ修道院はなかった。男性の場合は、神に奉獻された人はナジル人と呼ばれた。預言者サムエルも乳離れしたとき、母親のハンナに連れられて祭司エリのもとへ行き、ナジル人として神殿に捧げられた。

大天使ガブリエルからお告げを受けた時マリア様は、「私は神様だけに、自分を生涯捧げる決心をしています。これはどうにも譲れないことがらなのです。けれども、そんな私に、これから

生まれて来られる御子の母親になるという、どうしてそのようなことが起こり得るのでしょうか？」と大天使に質問されたのだ。

私の胸の中で滞っていたものはこれだった。

与えられた家庭という枠の中で、夫婦それぞれの貞潔をまもり、神様に奉献された生活を続けて行く。そういう決意と、加えて必要なことは相手の了解と同意。「『これ汝の母なり』G・M・ガレ著、トラピスト会司祭、山下房三郎訳」の中にも、マリア様のこと、聖ヨゼフの立場と、隠れて見えないその素晴らしい奉献について、同様のことが述べられていた。これは全知全能の神には相応しいことであった。神の子を人間の住む所へお迎えする。そんな信じられないようなことが起こった。

そのため崇高な結婚という準備があった。

これらのことを、先入観や潜在意識が隠して見えにくくなっていた。

神の愛への聖母の固い一致と奉献。人間に与えられた大いなる身分。そしてその謙遜、

その偉大さ。

母なる教会は、これを「毎日黙想しなさい」って『お告げの祈り』を勧めてくれていたんですね。